

日本の大学生は「やさしい日本語」を学ぶことで、 どのような視点を養ったか

千 仙永（国際基督教大学）

要旨

複言語・複文化主義に基づき、日本の大学生 114 名を対象に実施した「やさしい日本語」の教育効果を論じた。「やさしい日本語」の背景、作り方の理解、街中の「やさしい日本語」の事例分析、催し物のチラシ作成、会話文の作成といった活動をとおして、大学生の学びを促した。課題の提出物を分析した結果、大学生は、1) 日本社会に見られる言葉の多様性を受け入れ、2) 母語の日本語を構造的に分析できるようになり、3) 対人意識が向上し、4) 自身の日本語使用に対する気づきや見直しが行われたことがわかった。家庭内、学校、社会全般において、ほとんど日本語を使用してきた大学生は、「やさしい日本語」をとおして、日本社会、日本語の表現形式、対人コミュニケーションを俯瞰し、言語使用・姿勢を磨いていた。多文化共生社会をともに築く人材を育てる「やさしい日本語」の教育的意義が示唆された。

【キーワード】複言語・複文化主義、多文化共生社会、コミュニケーション、母語話者のための言語教育、日本語教育

Keywords: plurilingualism and pluriculturalism, multicultural convivial society, communication, language education for native speakers, Japanese language education

1 はじめに

1.1 「複言語主義」と日本語使用場面

近年、グローバル化が進む中、日本社会には外国人住民が増加し、日本語を学ぶ目的も多様化している。日本語教育は、変化し続ける社会の要請に応

え、日本語を母語としない者のための言語教育を超え、多様な背景を持つ人々が共存する社会づくりに貢献するための分野となりつつある。

こういった日本社会に応える日本語教育において、近年注目される言語教育観として「複言語主義」が挙げられる。「複言語主義」とは、個人の中に複数の言語が存在すると見なし、一人ひとりが複数の言語でコミュニケーションを行う能力を持つと見て、一つの言語に限定しないという価値観を持つことを指している（欧州評議会 2020）。この「複言語主義」は、さまざまな言語や文化が共存するヨーロッパ諸国においては身近な概念とされる。だが、母語も国語も一つの言語が一般的に用いられる社会においては、「複言語主義」に基づく考え方は比較的新しい概念だと言える。多文化共生を目指す社会において、「複言語主義」を発信していくためには、「複言語主義」に基づく教育実践が必要であり、その教育の成果を明らかにし、教育的意義を示す必要がある。

「複言語主義」という考え方を、日本語使用場面には次のように適用できる。まず、「個人の中に、複数の言語が存在する」という点から、日本語という一言語の中には、複数の言い回し（文体、語彙、待遇表現など）が存在すると言える。次に、「個々人が複数の言語でコミュニケーションを行う能力を持つ」という点から、相手が使う言語、言語を使う場面、コミュニケーションを行う内容に合わせて、使う言語を選ぶ場面が想定できる。日本語を使う際にも、相手・状況・内容に合わせて、言い回しを調整する能力は欠かせない。最後に、「個人が一つの言語に限定しない価値観を持つ」という点からは、日本語では、相手・状況・内容において使える言い回しが一つに限らないという点に通じるものがある。これらの複言語主義的な日本語の捉え方は、日本語話者にとって、より豊かな言語理解と使用を促すのであろう。

1.2 「やさしい日本語」に見られる「複言語主義」

近年、多文化共生社会を目指す日本社会において、相手に配慮した情報を伝えやすくするための概念として「やさしい日本語」が注目されている。阪

神淡路大震災において、地震による被害と復旧過程での情報が得られないことにより、多くの外国人が二重被害を受けたことをきっかけに、「やさしい日本語」は、日本在住の外国人に情報をわかりやすく伝えるために作られた。難しい言葉を言い換えるなど相手に配慮した日本語を指している。(出入国在留管理庁・文化庁 2020)

この「やさしい日本語」には、「複言語主義」の考えが見られる。複数の言い回し（文体、語彙、待遇表現など）を、相手に合わせて調整しながら、コミュニケーションを行うという点や、日本語の言い回しには一つだけ正解があるという考えを持たず、さまざまな形の日本語を、相手に合わせて使い、理解する、といった価値観が根底にある。

1.3 研究の目的

複言語・複文化主義に基づき、日本の大学生を対象に実施した「やさしい日本語」をテーマとした教育実践の効果を論じる。リサーチクエスチョン（Research Question, 以下 RQ）は、次のとおりである。

RQ：日本の大学生は「やさしい日本語」を学ぶことで、どのような視点を養ったか。

大学生が養った視点を参考に、「やさしい日本語」が教育現場や社会にもたらす教育的意義を考察する。

2 調査フィールド

筆者は、2023 年度春学期、東京都内の私立大学において、90 分×15 週間分の「日本語教育」というコースを担当した。この大学は、日本語教員養成課程は設置されておらず、教養としての「日本語教育」であり、人文学部の学生が履修する選択科目の一つであった。多文化共生社会の一員としての視野を広げ、今後のキャリア教育の一環として日本語教育の内容を周知するという目的で開講された。

2.1 コースの到達目標

コースでは、国内外における日本語教育の事情、日本語教師の専門性、日本語教育の指導内容・方法・教材・評価などの知識から、外国人住民とのかかわり、支援、社会問題など、幅広い内容を扱った。次の5点が、コースの到達目標である。

1. 日本語教育とは何かについて、国内外における日本語教育の事情や教師の専門性を挙げて説明することができる。
2. 外国語としての日本語の指導内容、方法、教材、評価などについて、その目的や効果について議論できる。
3. 日本語教育の観点から、多文化共生社会としての日本社会を捉え、外国人住民にどのような支援が必要か説明できる。
4. 「やさしい日本語」の観点から、非母語話者の日本語レベルを考慮し、相手にわかりやすい日本語を使用できる。
5. 生活の中の日本語に関わる課題を発見し、そこで起きる問題や要因を分析した上で、解決のための計画を立てられる。

本稿では、このうち4つ目の「やさしい日本語」の授業内容を取り上げ、教育の効果を検討する。

2.2 「やさしい日本語」の授業内容

「やさしい日本語」は、15回のうち、3回分の内容に該当する。各回では、「やさしい日本語」とは何か、文章の見直し、会話の見直しを扱った。また、次の課題を提出させた。1つ目は、「やさしい日本語」が施されている例を分析する課題である。身近な事例から多文化共生社会の現状を観察させ、「やさしい日本語」の対象や工夫を分析させた。2つ目は、催しごとのチラシを作成する課題である。1つ目の課題から分析した「やさしい日本語」の工夫を、今度は情報発信者として実践してみる活動である。3つ目は、会話文を作成する課題である。状況に合わせ、相手に配慮した言語使用とは何か考えるという意図が含まれている。それを通じて日本語話者としての言語使用について振

り返るようにした。表 1 に、3 回分のコンテンツと課題を示す。

表 1: 「やさしい日本語」授業に関する情報

トピック	コンテンツ	課題
「やさしい日本語」と何か	日本語の使用実態 「やさしい日本語」が現れた背景と、その特徴 「やさしい日本語」の現状 街中の事例分析	・自分が住んでいる町の中で、「やさしい日本語」が施されている例を一つ挙げる。 ①どの町を選んだか ②どのような場所で見つかったか ③誰に向けての「やさしい日本語」なのか ④「やさしい日本語」の工夫を具体的に書く
「やさしい日本語」という観点からの文章の見直し	『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』 電車のアナウンスにおける日本語の分析 「やさしい日本語」を使った情報発信	・「やさしい日本語」で催し物のチラシを作る。 ①元の文章を探す（最初から作成してもよい） ②元の文章を、「やさしい日本語」で書き直す Step 1: 日本人にわかりやすいか Step 2: 外国人にもわかりやすいか Step 3: 「やさ」にチェックマークまたは「リーディングチュウ太」でわかりにくい表現はないか確認する
「やさしい日本語」という観点からの会話の見直し	『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン話し言葉のポイント』 「やさしい日本語」を使った会話分析	・「やさしい日本語」で会話文を作る。 ①状況や場面の説明 ②会話文 ・「やさしい日本語」が出てきた日本社会の背景についてまとめたうえで、「やさしい日本語」の作り方を説明する。また、今後の自分自身の日本語使用について改めて考えたことを書く。

3 データ分析とその結果

本稿でデータとして用いるのは、表 1 で示した課題の提出物である。114 名の受講生が提出した 3 回分の課題の内容を分析した。分析観点は、日本語を捉える視点である。全体像を把握するために量的な分析を行いつつ、具体的な内容は質的に分析している。質的分析には、コーディング手法を用い、課題の文面から抽出されたコードをカテゴリー化した。また、カテゴリーを統合・分割し、繰り返し調整した。その結果、大学生は、言葉の多様性を受け入れる視点 (3.1)、母語の日本語を構造的に分析する視点 (3.2)、日本語話者

として相手に配慮する視点 (3.3), 日本語話者として自身の日本語使用を見直す視点 (3.4) を養ったことがわかった。

3.1 言葉の多様性を受け入れる視点

大学生は、「言葉の多様性を受け入れる視点」を養った。課題の指示に従って、自分が住んでいる町における「やさしい日本語」を見つける活動に取り組んでいた。日ごろスマートフォンやパソコンを使ってよく利用するウェブサイトや、通学、アルバイト、生活場面においてよく利用する駅やコンビニといった身近な場所において、「やさしい日本語」の使用例に目を向けていた。日本社会において施されている様々な言葉の使用に敏感になり、多様性を受け入れる視点を育てている様子がわかった。

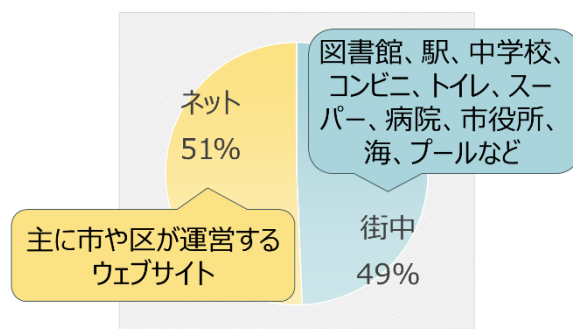


図1: 大学生が「やさしい日本語」を見つけた町と場所（課題①）

彼らは、課題①で地域や大学のイベントにおける「やさしい日本語」を見つけ、その工夫を観察した。そこで得た「言葉の多様性を受け入れる視点」を、今度は課題②において、催しごとの案内文の作成に活かした。「やさしい日本語」を使った情報発信を試みた。主に地域や大学など身近なものから「やさしい日本語」の工夫を観察し、自分と関連するものから情報発信を試みる様子がうかがえた。

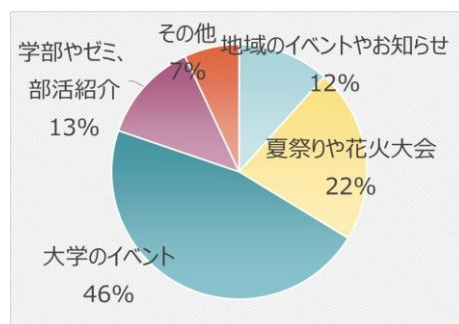


図2: 大学生が「やさしい日本語」で書いた催しごと（課題②）

3.2 母語の日本語を構造的に分析する視点

大学生は「母語の日本語を構造的に分析する視点」を養った。課題には、「やさしい日本語」の特徴を分析するものが含まれていた（表1の下線部）。その課題の指示に従い、彼らは日本語の特徴を言語化し、その構造を分析した。例えば、市役所の外国人向け情報誌を分析している課題の提出物では、

「最寄り駅」が「一番近い駅」というふうに表記が変わっている点を見つけ、
「最寄り駅」という語彙を語構成から構造的に分析し、漢字の読みや意味が
外国人にどう伝わるかを吟味している様子が見られた。

「最寄り」という漢字が「一番近い駅」という表記が変わっていた。そもそも
「最寄り」という漢字が読みづらく分かりにくいことと、「最」という漢字を一
番として認識することが外国人には難しいと感じた。それを「一番」という分
かりやすい表現に変えることで、外国人にも聞きなれた言葉で案内できる工夫
がされている。(大学生による市役所の外国人向け情報誌の分析、課題①)

次に示す文章は、課題②の提出物の一つで、元の文章を「やさしい日本語」
に書き直したものである。元の文章である学部のお知らせは、主語の中学生
を修飾する部分(下線部)がやや長く、主語と述語が最後になるにつれ、一見
するとややねじれているような構造である。

今まで触れるチャンスもなかった言語で話しかけられた中学生たちは、最初は
緊張気味でしたが、学科お得意のフレンドリー&温かなコミュニケーションに
中学生からも笑みがこぼれました。(大学生が探した元の文章、課題②)

この文章を見つけた大学生は、主語をわかりやすく調整し、一文をとおし
て主語と述語が呼応するように工夫している様子が見て取れる。

ちゅうがくせい はじ はな げんご さいしょ きんちょう がくせい やさ
中学生は初めて話す言語だったので最初は緊張していましたが、学生が優しく
はな さいご わら
話していたので最後には笑っていました。(大学生が書き直した文章、課題②)

ほかにも、書き直し文章には、語彙レベル、文レベル、スタイル、視点、抽
象度など、日本語を構造的に分析して、相手に伝わりやすい言い回しを工夫

している様子が多々見られた。表 2 に、大学生が着目している要素を示す。

表 2：大学生が書き直した文章の特徴（課題②）

上位項目		下位項目
言語要素	語彙レベル	ふりがな，二字熟語を和語へ，重複を避ける
	文レベル	一文一義，主語を明確にする
	スタイル	待遇表現（敬語，謙譲語など）を避ける
文法要素	視点	視点を変える／揃える，受動態（受け身）を能動態へ
語彙要素	抽象度	項目化，抽象度の調節，見出し
視覚的要素		行間，フォントの大きさ，スペース空け，色を変える，太字

3.3 日本語話者として相手に配慮する視点

大学生は、「日本語話者として相手に配慮した視点」を養った。課題③において、一人の学生は自分がアルバイトをしている店での接客場面を想定し、「やさしい日本語」で会話文を作成している。しかも、文ごとに相手に配慮した行動方針もつけている様子が見られた。「やさしい日本語」の実践の教育効果は言葉だけでなく、対人意識、態度や行動にも表れる可能性が示された。

「なにかお探しですか？」 → 自分（店員）が近づく。

「〇〇ですね！」 → 商品や物の情報を理解する。分からない場合、担当を変えたり、無線で聞く。絶対 1 人にしない。

「売り場までご案内いたします！」 → 一緒に売り場まで行く。

（大学生が「やさしい日本語」で書いた会話文，課題③，下線は筆者）

3.4 日本語話者として自身の日本語使用を見直す視点

大学生は、「日本語話者として自身の日本語使用を見直す視点」も養った。3.3 で示した「相手に配慮する視点」は、自身の日本語使用を見直す視点にも寄与しているようである。

大学生が作成した会話文では、外国人から質問を受け、相手に安心感をもたせようという工夫が、自身の日本語使用にも繋がるという特徴が見られた。

つまり、大学生は、相手への配慮と、自分自身の言葉の使用を往還させながら、日本語使用を見直す視点を深めていったのではないか。

状況説明：電車利用時の案内、多摩センター駅で渋谷への行き方を聞かれた。

外国人「すみません、渋谷に行きたいです。」

私 「渋谷ですね、京王線です。」

(中略)

私 「明大前で一回降ります。そのあと渋谷行きの電車に乗ります。」

外国人「分かりました！ありがとうございます。」

(大学生が「やさしい日本語」で書いた会話文，課題③)

「明大前で乗り換え」という日本人ではすぐ理解できることを、一度明大前で降りて、渋谷行きの電車に乗ると伝えることでよりやさしくなると考えた。またそれ以外にも「渋谷ですね」と相手の言いたいことが伝わってるよと自分から言うことで安心感をもたらすのではないかと考えた。

(上記会話文に対する大学生の説明，課題③)

また、3回をとおして「やさしい日本語」を学んでいった結果、大学生は自身の日本語使用を見直し、今後言葉遣いに注意していこうという心構えを示す場合が多く見られた。授業で議論した内容をとおして、ふだん意識せずに使っている日本語に対する気づきや見直しが促されたようである。

「やさしい日本語」を意識したことがなかったため、今までの自分を振り返ってみると、「やさしい日本語」とは何かの講義1回目にてできたような、「やばい」などの伝わりにくい語彙をよく使っていたということを実感した。外国人だけでなく、高齢者や障害を持っている人にも必要なやさしい日本語を今後は講義内容を身につけ、使用していきたい。

(今後の自分自身の日本語使用について，課題③)

4 日本語教育への示唆

4.1 母語話者を対象とした日本語教育

本研究における大学生は、家庭内、学校、社会全般において、ほとんどが日本語を使用してきた。そのため、教育現場または社会の中で、複言語・複文化能力を養う環境をデザインしないと、自然には学びが生まれにくいと予測される。そこで、本研究の調査フィールドでは、「複言語主義」に基づく視点の育成を図って、実践の場を設けた。

その結果、日本の大学生は、日本社会における言葉の多様性に敏感になるだけでなく、その言葉の体系を構造的に見る視点を養った。また、コミュニケーションにおける対人意識や自分自身の日本語使用を見直す視点を養った点が示された。本研究の調査フィールドであった「日本語教育」コースは、多文化共生社会をともに生きる市民として教養を涵養することが図られていた。その中でも「やさしい日本語」をテーマに実施した教育実践は、日本社会を複言語主義の観点から言葉の理解と使用に着目させ、地域社会への興味や関心を促す効果がある点が示された。また、日本語の体系や構造に対するメタ言語能力を育成する効果が得られる可能性が示唆された。このように言葉に着目して社会を見る視点は、コミュニケーションにおいて、相手を思いやる言語の使用者・理解者になることを促している点がわかった。

「やさしい日本語」をテーマに日本の大学生を対象とした教育実践は、多文化共生社会をともに生きる市民としての教養や意識の涵養という教育目的の達成に寄与していることがわかった。やさしいまなざしで、日本社会を生きる言語使用者・理解者を見る視点は、多文化共生社会を支える一員を養成する教育実践として重要な意味を持つと言える。「複言語主義」に基づいた教育実践をとおして、コミュニケーションにおける相手への配慮や、自分自身の言葉使用を見つめる力を養える可能性が示唆された。ふだんよく使う言葉に焦点を当て言語化する機会を設け、コミュニケーション場面を眺める試みは、多文化共生社会になりつつある日本社会において重要な教育活動である。

それは日本国内における日本語教育の重要な役割ともいえるのではないか。

4.2 ヨーロッパにおける日本語教育実践

日本の大学生が取り組んでいた、「やさしい日本語」の文章作りや会話文作りの活動は、日本語学習者を対象とした日本語教育現場にも応用できる。

まず、言葉の多様性を受け入れる視点は、日本語の表現には、正解が一つあるわけではなく、相手・状況・内容に応じて、さまざまな言い回しを使えるという言語学習観と繋がる。より柔軟な姿勢で学ぶことを可能にするのではないか。

次に、元の文章と、「やさしい日本語」で書き直した文章がどのように異なるかを分析するような活動は、日本語学習者を対象とした日本語教育実践にも応用できる。表現の違いやその特徴を言語化する中で、日本語を構造的に分析する視点が育まれていくことが期待できる。

最後に、言葉を交わし合う相手に、自分の話したことがどう伝わるかを意識する視点、自身の日本語使用を見直す視点は、日本語学習者にとっても欠かせないものである。

5 おわりに

複言語・複文化主義に基づき、日本の大学生を対象に実施した「やさしい日本語」の教育効果を論じた。大学生は、1) 言葉の多様性を受け入れる視点、2) 母語の日本語を構造的に分析する視点、3) 日本語話者として相手に配慮する視点、4) 日本語話者として自身の日本語使用を見直す視点を養ったことがわかった。家庭内、学校、社会全般において、ほとんど日本語を使用してきた日本の大学生にとって、「やさしい日本語」は、日本社会、日本語の表現形式、対人コミュニケーションを俯瞰させられ、言語使用・姿勢を磨くという教育効果が示された。多文化共生社会をともに生きる人材を育てる教育的意義が示唆された。

<引用文献>

欧州評議会（2020）『言語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照
枠 随伴版』．

出入国在留管理庁・文化庁（2020）「在留支援のためのやさしい日本語ガイ
ドライン」 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/924
84001_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/92484001_01.pdf)（2024 年 9 月 30 日）．

What perspectives have Japanese undergraduates developed through learning "Yasashii-nihongo"?

Sunyoung CHUN (International Christian University)

Abstract

This study examines the teaching of "Yasashii-nihongo," which is an easy-to-understand form of Japanese designed for non-native speakers, to undergraduates at a university in spring 2023. The aim is to develop a basic understanding of Japanese language education and encourage students to reflect on the language's role in society. The course involved 114 students who do not specialize in Japanese.

Over fifteen weekly sessions, the three-week "Yasashii-nihongo" segment included lessons on its history, usage, real-world applications, flyer creation, and conversational text production. Analysis of three assignments per student revealed four key outcomes: 1) acceptance of linguistic diversity in Japan, 2) enhanced structural analysis of their native language, 3) improved interpersonal awareness, and 4) reflection on their own Japanese usage.

Participants, who typically used Japanese in everyday life, gained perspectives on Japanese society and communication, gradually applying "Yasashii-nihongo" principles in their lives. This approach fosters openness toward a multicultural convivial society and highlights the importance of Japanese language pedagogy for undergraduates.